

「対立」と「和解」

——北アイルランド紛争後社会の二つの住民集団の記憶と表象——

九州大学比較社会文化研究院 特別研究員 福井令恵

1 目的

本報告は、北アイルランド社会を事例として、長年対立関係におかれた二つの住民集団（プロテスタント系住民である「ロイヤリスト」とカトリック系住民である「リパブリカン」）が、和平合意後、どのような集合意識や記憶を表現するのかについて解明することを目的とする。分析対象は、北アイルランドの都市空間の中に多数存在する壁画（Mural）である。北アイルランドの壁画は、紛争を経験した地域に住む住民（おもに労働者階級）の手によって主に描かれ、描き替えられてきたものであり、住民に最も身近な表現媒体である。

2 方法

ベルファストの都市空間に存在する壁画を記録する作業を2003年～2009年にかけて行った。どのような場所で、どのような壁画に変化があるのか/ないのか確認した。また、2007年の調査をもとに、壁画の題材を分類し、二つのコミュニティで描かれる内容について、おおよその傾向を確認した。

3 結果

ベルファストにある壁画を全体として見通すと、二つのコミュニティで重ならない題材と共通する題材があることが確認された。「歴史」を題材にしたものでは、別々の異なる歴史的出来事を二つのコミュニティがとりあげており、両者が重なることはない。それぞれが別々の異なる歴史——ロイヤリスト・コミュニティではソムムの戦い、リパブリカン・コミュニティではイースター蜂起——を描き、北アイルランド社会の分断状況を反映するものであった。「文化」の 카테고리も同様に、分断社会を反映する。

他方で、「子どものプロジェクト」、「メモリアル（追悼）」、「刑務所」、「地域の問題」を題材にした壁画については、両コミュニティで同様に採りあげられ、描かれる。地域の共通の経験と課題（政治犯の社会復帰の問題、若者の教育や権利、生活環境の改善）によって、こうした壁画は描かれる。

それぞれ相手側のコミュニティについて直接言及することはほとんどないものの、紛争後にも続くいくつかのコミュニティの問題が同じであり、それゆえに、同じ題材を選んで壁画に表現する場合があること、そうしたコミュニティに内在する問題への意識から、ごく少数ながら共同作業がみられること、また特に重要な点として、追悼のあり方、紛争地に住む人々の経験に根ざした感情の部分については、紛争地の外に住む人（＝とくに中産階級の人々）とは異なる、同じ追悼方法が用いられることが壁画の分析を通じて明らかになった。

4 結論

二つの住民集団が描く壁画の題材からは、地域の経験へのこだわりという共通性がみられた。和平合意後も、歴史や文化の題材に関しては、おおむね社会の分断状況を反映している点に大きな変化はない。「歴史」や「文化」を題材にした壁画では、「和解」を直接的に描くものはほとんど見られないが、受苦の経験とそれに対する認識というレベルでは、一定の共通認識と相手のコミュニティの状況への理解がみられるのである。負の記憶に触れないことによって分断社会を超えようとする「未来志向」（政府の政策）ではなく、身近な人を亡くし、経済的・社会的困難にも長年苦しんできたというコミュニティの状況へのこだわりが共に表現される。それは、話し合いから生まれる対話と理解とは異なる、「当事者性」をもとにした、対立する相手へのある種の「理解」のあり方である。